

令和 4 年 6 月 2 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K10266

研究課題名(和文) がん患者に対して終末期に実施された看護ケアと遺族によるケアの質の評価の縦断調査

研究課題名(英文) Nursing Care Provided to Cancer Patients at the End of Life and bereaved family members' Evaluation of the Quality of Care

研究代表者

宮下 光令(Mitsunori, Miyashita)

東北大学・医学系研究科・教授

研究者番号：90301142

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では大規模調査のデータを用いて、看護ケアと遺族によるケアの質の評価の関連等を検討した。遺族調査は2018年7月～2019年3月に実施した。主たる結果は以下のとおりである。(1)終末期がん患者の呼吸困難に関して一般的に望ましいと考えられているケアはほぼ全ての項目で実践されており、遺族も高く評価した。(2)原発不明がん患者の遺族は「なかなか診断がつかず焦りを感じる」「患者の病気に関する情報を得るのが難しい」「他人にがんの特徴を分かってもらえない」といった苦悩を抱えていた。(3)家族機能が良好でないほど、うつを有する割合が高かったが、悲嘆とは関連しなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

(1)終末期がん患者の呼吸困難に対する望ましいケアについて明らかになった。(2)原発不明がん患者の家族に対してどのようなケアが必要であるか明らかになった。(3)遺族のうつを減らすには家族機能のアセスメントや家族へのケアが必要であることが明らかになった。(4)患者の認知機能低下している場合にどのようなケアが必要であるか明らかになった。(5)スピリチュアルペインを抱える家族にどのようなケアが必要か明らかになった。(6)遺族の遺族ケア利用の実態と評価が明らかになった。(7)患者の望ましい死の規定因子が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study analyzed a large-scale post-bereavement survey data to examine the relationship between nursing care and the assessment of quality of care. The survey of was conducted from July 2018 to March 2019. The primary results are as follows.(1) Almost all care generally considered desirable for dyspnea in terminal cancer patients was practiced, and bereaved families rated it highly. (2) Bereaved family members of patients with cancer of unknown primary cause were distressed by the following: "I felt flustered because it is difficult to obtain a diagnosis," "It was difficult to obtain information about the patient's disease," and "It was difficult for others to understand the characteristics of the cancer. (3) The depression was higher for those with less favorable family functioning, but it was not associated with grief.

研究分野：緩和ケア

キーワード：緩和ケア 終末期医療 遺族調査

1. 研究開始当初の背景

終末期がん患者は痛みなどの身体的・心理的・社会的・スピリチュアルな苦痛を経験する。これらの苦痛の緩和には医学的治療より看護ケアが有効である場合が多く報告されている。一般に終末期ケアの質の評価は患者の心身の脆弱性・認知機能・意識障害などにより遺族調査が標準的な評価方法として用いられてきた。しかし、わが国で実施された遺族調査は横断調査であり、死亡前の医療や看護ケアの情報は遺族への聴取に頼らざるを得ず、信頼性に欠けるという限界があった。研究開始当時、わが国の緩和ケア病棟 22 施設で「緩和ケア病棟における医療の実態を明らかにする多施設共同研究(以下「緩和ケア病棟実態調査」とする)」が実施中されていた。これは緩和ケア病棟に入棟する 2,000 人の終末期がん患者に提供された医療の実態を調査する前向き観察研究であり、患者の症状、実施された治療やケア、患者・家族の心理社会的側面、スピリチュアルな問題などのデータが共通の調査票を用いて前向きに収集されていた。しかし、この「緩和ケア病棟実態調査」は横断的な観察研究を目的として計画されたため、看護ケアに関連する事象等を死別後の遺族の視点から評価することは計画されていなかった。看護ケアに関連する事象を遺族調査と結合して評価できれば、終末期における看護ケアを遺族の視点から評価することが可能になると考えられた。

2. 研究の目的

本研究では「緩和ケア病棟実態調査」に加えて「遺族調査」を実施し、これらのデータを結合することにより終末期に実施された看護ケアについて、遺族の視点から評価を実施することを目的とした。具体的には以下の課題を扱った。

- (1) 終末期がん患者の呼吸困難に対する望ましいケアに関する研究
- (2) 原発不明がん患者の家族の体験に関する研究
- (3) 死別後の家族機能が遺族のうつ・複雑性悲嘆に与える影響に関する研究
- (4) 認知機能低下を有する終末期がん患者の家族の体験に関する研究
- (5) 終末期がん患者の家族のスピリチュアルペインについて
- (6) 遺族の遺族ケア利用の実態
- (7) 望ましい死の規定因子について

3. 研究の方法

遺族調査は 2018 年 7 月～2019 年 3 月に実施した。遺族調査の対象はわが国の緩和ケア病棟 186 施設で 2018 年 1 月以前に死亡した患者の家族である。調査方法は自記式質問紙による輸送調査であり、質問紙は全ての対象者に共通した項目と本研究用にランダムに配置された付帯質問項目からなる。調査票は研究参加施設から郵送し、事務局(東北大学)で回収した。調査票郵送後 1 カ月後に全対象者に対して御礼を兼ねた督促を実施した。

全ての対象者に共通した質問としてはケアの構造評価のための Care Evaluation Scale

ver2.0 短縮版、ケアのアウトカムの評価のための Good Death Inventory、抑うつスクリーニング尺度である Patient Health Questionnaire 9、複雑性悲嘆のスクリーニング尺度として Brief Grief Questionnaire などを用いた。個々の付帯研究に関しては研究結果の欄に記す。

遺族調査のデータ回収後に、既の実施済みであった緩和ケア病棟実態調査のデータと結合し、分析を行った。なお、研究計画時には緩和ケア病棟実態調査のデータと結合が可能であったデータのみを分析対象とする予定であったが、今回のテーマは遺族調査単独で評価できるものが多かったため、遺族調査のデータすべてを解析に用いた。

本研究は東北大学大学院医学系研究科倫理委員会の承認後に実施した。

4. 研究成果

遺族調査全体の発送数は 15064 であり、回収数は 9326 であった（回収率 62%）。以下に個々のテーマの主たる結果を示す。

（1）終末期がん患者の呼吸困難に対する望ましいケアに関する研究

533 名の呼吸困難を体験した患者の遺族が対象になった。終末期がん患者の呼吸困難に関して一般的に望ましいと考えられているケアはほぼ全ての項目で実践されていた。呼吸困難に関するケアに対する遺族の評価は概ね高く、患者の呼吸困難の強さとは関連しなかった。この結果は Journal of Pain and Symptom Manage 誌に受理された。

（2）原発不明がん患者の家族の体験に関する研究

原発不明がん患者の診断期の苦悩について調査した。原発不明がん患者の遺族 97 名のデータを分析した。肺がん・胃がん・大腸がんの患者の遺族と比較した結果、原発不明がん患者の遺族で有意に高かったものは「なかなか診断がつかず焦りを感じる」「患者の病気に関する情報を得るのが難しい」「他人にがんの特徴を分かってもらえない」「病気を治療できる専門医が見つからない」「患者のがんの一般的な経過が予測できず将来の見通しが立たない」であった。この結果は Supportive Care in Cancer 誌に受理され、追加解析を行った別論文も準備中である。

（3）死別後の家族機能が遺族のうつ・複雑性悲嘆に与える影響に関する研究

Family Relationship Index を用いて家族機能が遺族の精神健康に与える影響を検討した。家族機能が良好でないほど、うつを有する割合が高かったが、悲嘆とは関連しなかった。医療者に悩みを相談できた遺族はうつが少なかった。この結果は Journal of Pain and Symptom Manage 誌に受理された。

（4）認知機能低下を有する終末期がん患者の家族の体験に関する研究

患者の認知機能低下を感じた家族 340 名のデータを分析した。その 80%以上の家族が、患者の認知機能の低下の理由を理解し、受け入れることが出来たと回答した。患者に認知機能の低下がある場合、家族の介護負担は高い傾向にあり、特に患者とのコミュニケーションに困難を感じていた。家族に対する医療者のケアの評価は総じて高かったものの、患者と家族のコミュニケーションを支援する必要性がし支えられた。この結果は現在論文投稿中である。

（5）終末期がん患者の家族のスピリチュアルペインについて

終末期がん患者のスピリチュアルペインについて検討した。「患者が衰えていく姿を見てつらい

と思った」「患者が自分のことができなくなる姿をみてつらいと思った」という項目では90%以上がそう思うと回答した。医療者に行きたくしいと思った関わりとして「安心して話せる環境をつくってくれる」「患者の病気や死の意味と一緒に考えてくれる」という項目で50%以上の遺族がそう思うと回答した。この結果は現在論文投稿準備中である。

(6) 遺族の遺族ケア利用の実態

遺族の遺族ケア利用は「病院スタッフからの手紙やカード(48%)」「病院スタッフと病院で会うこと(30%)」「故人を偲ぶ追悼会(22%)」「病院スタッフからの電話(18%)」「がん相談支援センターへの相談(11%)」の順に高く、そのほかも含んだ遺族ケアについて多くが肯定的に評価した。この結果は現在投稿準備中である。

(7) 望ましい死の規定因子について

18項目から構成される Good Death Inventory のどの要素が全般的な望ましい死(Good Death)の評価を規定するか分析した。全般的な望ましい死と関連が強かった上位5項目は「自然に近い形で過ごせた」「おだやかな気持ちで過ごせた」「人生を全うしたと感じていた」「納得がいくまで治療を受けられた」「望んだ場所で過ごせた」であった。論文は投稿準備中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Yamamoto Sena, Arao Harue, Aoki Miwa, Mori Masanori, Morita Tatsuya, Kizawa Yoshiyuki, Tsuneto Satoru, Shima Yasuo, Masukawa Kento, Miyashita Mitsunori	4. 巻 62
2. 論文標題 Care Associated With Satisfaction of Bereaved Family Members of Terminally Ill Cancer Patients With Dyspnea: A Cross-sectional Nationwide Survey	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Pain and Symptom Management	6. 最初と最後の頁 796 ~ 804
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jpainsymman.2021.03.023	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Hiratsuka Ryoko, Aoyama Maho, Masukawa Kento, Shimizu Yoichi, Hamano Jun, Sakaguchi Yukihiro, Watanabe Miwa, Morita Tatsuya, Kizawa Yoshiyuki, Tsuneto Satoru, Shima Yasuo, Miyashita Mitsunori	4. 巻 62
2. 論文標題 The Association of Family Functioning With Possible Major Depressive Disorders and Complicated Grief Among Bereaved Family Members of Patients With Cancer: Results From the J-HOPE4 Study, a Nationwide Cross-Sectional Follow-Up Survey in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Pain and Symptom Management	6. 最初と最後の頁 1154 ~ 1164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jpainsymman.2021.06.006	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Ishida Kyoko, Sato Kazuki, Komatsu Hirokazu, Morita Tatsuya, Akechi Tatsuo, Uchida Megumi, Masukawa Kento, Igarashi Naoko, Kizawa Yoshiyuki, Tsuneto Satoru, Shima Yasuo, Miyashita Mitsunori, Ando Shoko	4. 巻 30
2. 論文標題 Nationwide survey on family caregiver-perceived experiences of patients with cancer of unknown primary site	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Supportive Care in Cancer	6. 最初と最後の頁 6353 ~ 6363
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s00520-022-07070-x	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田村 恵子 (Tamura Keiko) (30730197)	京都大学・医学研究科・教授 (14301)	
研究分担者	荒尾 晴恵 (Arao Harue) (50326302)	大阪大学・医学系研究科・教授 (14401)	
研究分担者	安藤 詳子 (Ando Shoko) (60212669)	名古屋大学・医学系研究科(保健)・教授 (13901)	
研究分担者	渡邊 美和 (Watanabe Miwa) (90554600)	千葉大学・大学院看護学研究科・助教 (12501)	
研究分担者	森田 達也 (Morita Tatsuya) (70513000)	聖隷クリストファー大学・看護学研究科・臨床教授 (33804)	
研究分担者	青山 真帆 (Aoyama Maho) (30781786)	東北大学・医学系研究科・助教 (11301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------